

新潟市営住宅に住む高齢者の椅子とベッドの使用による住まい方の特徴

都市在宅高齢者の住空間計画に関する研究

THE ELDERLY'S LIVING STYLE BY USING BED AND CHAIR IN PUBLIC HOUSING IN NIIGATA

A study on the planning of living spaces for elderly living in urban areas

林文潔 — *1 西村伸也 — *2
高橋百寿 — *3 黒野弘靖 — *4

Wenjie LIN — *1 Shin-ya NISHIMURA — *2
Yuzumi TAKAHASHI — *3 Hiroyasu KURONO — *4

キーワード:

市営住宅, 単身高齢者, 高齢者夫婦, 住まい方, 和式, 様式

Keywords:

Public housing, Single elderly, Elderly couples, Living style, Japanese style, Western style

The purpose of this paper is to capture the characteristics of elderly's living style by using bed and chair in public housing in Niigata. The main findings are as follows. 1) It's one of the reasons for elderly couples separate bedrooms that husband or wife using bed, and the elderly couples taking daily living space in different rooms is related to husband or wife takes chair-seat only. 2) Some problems are incurred from using bed and chair, for example, larger space is necessary when the chair-seat exists together with the floor-seat. The living spaces of husband and wife are separated from each other when one of them uses bed and chair only, etc. 3) For the single elderly, by using bed and chair, the place of dining and entertaining separate from the daily living place, further, the daily living place is distributed in one room.

1. 研究の背景と目的

日本では、高齢化が急速に進展している中で、高齢者単身世帯・夫婦世帯の増加に対応した居住環境の整備は直面前課題であり、低所得者を支援するための市営住宅においても、重要な課題の一つとなっている。新潟市の市営住宅において、60才以上の高齢者を含む世帯の割合は1995年29.1%、2000年36.7%、2005年は43.8%で半分弱と高い割合を占めている。その中で高齢者単身世帯が全入居世帯に占める割合は1995年15.5%、2000年18.6%、2005年20.8%と増加し、高齢者夫婦世帯は1995年5.4%、2000年7.2%、2005年9.0%である^(注1)。また、現状では殆どの高齢者が入居後に身体能力が低下してもそのまま住み続けている。ベッドや椅子の利用は和式の住様式から洋式への変化を強いられ、様々な工夫が必要になる。したがって、高齢者の住要求の変化に対応できるような住空間計画が求められ、そのために、高齢者の身体能力の低下による居住実態を明らかにすることが重要な課題であると考えられる。

集合住宅における高齢者の住まい方の関連研究は、古賀紀江らによる「一人暮らしの高齢者の常座をめぐる考察」^(注2)では、高齢者が住居内において座の分類と特徴、常座のしつらえ、場の形成に関わる諸要素等についてまとめた。小川正光はシルバーハウジングにおける単身と夫婦高齢者が食事・くつろぎ・就寝が行われる居室の位置、前住居に比べ生活様式の変化及び居住者の希望を考察した。^(注3)。そして、橋弘志らによる一人暮らし高齢者の住居内生活行為

の場と質・秩序、及び外部空間との関係を分析した研究^(注4)や、沢田知子らによる「熟年・高齢期」のライフスタイルと住まい方の特徴、及びライフワーク活動や生きがい等に着目した研究^(注5)、増永理彦らによる公団賃貸住宅における高齢夫婦を対象に、同別室就寝及び就寝室の選択とその理由、就寝形態について分析し、また、単身高齢者を対象に、食・寝・居・接客の生活行為に対応した場所の選定や広さに対する満足度及び生活形態をまとめた研究^(注6)、番場美恵子らによる高齢期の年齢を軸に5ステージに分け、生活行為を「客・共・個・寝」の4つに分類し、住まい方の変容過程を分析した研究等^(注7)があげられる。

しかし、高齢者の身体能力の低下によって、住様式が和式から洋式^(注8)に変る場合の住まい方の特徴については、まだ十分な研究が行われていない。本稿は、新潟市の市営住宅に住む単身高齢者と高齢者夫婦を対象に、ベッドや椅子の使用による住まい方の特徴や居住実態を把握することを目的としている。その上で、面積が限られた市営住宅において、高齢者がより住みやすく、住み続けられる住空間形成の計画指針を探ろうとするものである。

2. 調査概要

調査は、2001年12月から2002年3月にかけて、新潟市市営住宅に住む60才以上の高齢者を対象とし、アンケート調査144名(男47名、女97名)、実測調査26戸を行った。

*1 新潟大学大学院自然科学研究科 博士後期課程・工修
(〒950-2181 新潟市五十嵐2の町8050)

*2 新潟大学工学部建設学科 教授・工博

*3 新潟大学工学部建設学科 技術職員

*4 新潟大学工学部建設学科 助教授・工博

*1 Ph. D. Student, Graduate School of Science and Technology, Niigata Univ., M. Eng.

*2 Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Eng., Niigata Univ., Dr. Eng.

*3 Technical Staff, Dept. of Architecture, Faculty of Eng., Niigata Univ.

*4 Assoc. Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Eng., Niigata Univ., Dr. Eng.

調査方法については、調査員が団地内を一戸一戸を廻って高齢者のいる世帯にアンケート調査票を配布し、回収する際に実測調査を依頼する方法とした。実測調査は、住戸の間取りと各室の設えを図面に記録し、写真撮影及び生活実態のヒアリングを行った。

2.1 調査対象団地の概要

調査対象団地は建設年代及び所在地を考慮し、代表的なものを選定した。団地の規模、特徴等を表-1に示す。

2.2 アンケート調査対象者の概要

(1) 年齢と健康状況

アンケート調査対象者の平均年齢は72.04才で、年齢の分布は60代40.2%、70代41.7%、80代18.1%となっている。健康な高齢者(「とても健康」、「無理はきかない」)は82.6%を占めており、病気を抱える高齢者(「病気がち」、「寝ていることが多い」)の割合は60代17.2%、70代11.7%、80代は3.8%となる(図-1)。80才を境に健康状態は変化する傾向が認められる。(X²検定でP=0.10)

(2) 家族構成

図-2に示すように、高齢者は独居率(47.9%)が高いのが特徴的で、高齢者夫婦世帯(25.0%)を含め高齢者のみ世帯は70%を超えている。三世帯同居は僅か2.8%である。二世帯同居は22.2%で、全て未婚子との同居である。

(3) 夫婦同寝・別寝の現状と希望

アンケートの集計結果により、現状としては、夫婦が同室で就寝する「同寝」は58.3%、別室に分かれて就寝する「別寝」は41.7%となっている。中には、同寝で別寝を希望しているのと別寝で同寝を希望しているのがそれぞれ8.3%あり、そこには就寝の現状と希望する就寝形態に齟齬が生じている。(図-3)

2.3 実測調査対象者の居住状況

実測調査対象者の居住状況を見ると、表-2に示すように、単身高齢者の場合は、「2DK」を主とするが(8/13例)、「1DK」(3例)と「3DK」(2例)の場合もある。「夫婦のみ」は「2DK」3/9例、「3DK」6/9例であり、3人以上の世帯は全て「3DK」の住居に住んでいる。全体的に居住面積は50m²~70m²未満に分布し(21/26世帯)、世帯あたりの平均は57.12m²である。

3. 生活様式の傾向

ここでは、アンケート調査により、高齢者の就寝・食事・くつろぎにおいて和式か洋式の傾向、及びそれらと年齢や配偶者の有無、夫婦の同寝・別寝との関係について考察する。

3.1 就寝での布団とベッドの利用

図-4に示すように、「配偶者なし」の場合には、「ベッド」で就寝する高齢者は半分弱の42.1%を占めている。また、別寝では28.6%、同寝では14.8%で、別寝の高齢者がベッドで就寝する割合が同寝に比べて13.8%も高くなっている。「配偶者なし」と夫婦別寝の場合に、ベッドでの就寝が高くなる傾向が見られる。(X²検定:P=0.03)市営住宅では夫婦が同室でベッドを使う空間条件を備えていないことが要因だと考えられる。

さらに、年齢別に就寝の様式を見ると、ベッドで就寝する高齢者の割合は60代で32.8%、70代で25.4%に対して、80代では61.5%と過半数を占めている。このように80歳を境にしてベッドでの就寝が布団での就寝と逆転して増える傾向が捉えられた。(X²検定:P=0.005)

表-1 調査対象団地の概要

団地	建設年代	住戸	住戸型	周辺環境及び団地の特徴
MY	1981~87年	265	K・DK	信濃川の河口付近に立地し、住宅は3~5階である
YY	1975~80年 1986~91年	1037	DK・LDK	建替えを進めている団地の一つである。環境がよく、3~4階の住宅を主として高層住宅もある
SN	1969~75年 1995~98年	951	K・DK・LDK	建替えを進めている団地の一つである。建替え後の住宅は12階一部3階で、バリアフリー化している
KB	1992~96年	123	DK・LDK	身体障害者向け住戸型があり、鉄道沿いに位置する小規模中層住宅団地である
HM	1983、93、97年	270	DK・LDK	市街地の近くに分散しているいくつかの小規模団地から構成され、建物は主に高層である

表-2 実測調査対象の家族構成と居住状況

世帯当り人数	家族構成	間取り	世帯当り居住面積
1人(13例)	「単身」(13例)	1DK(3例) 2DK(8例) 3DK(2例)	53.42(m ²)
2人(10例)	「夫婦のみ」(9例) 「単身+子」(1例)	2DK(3例) 3DK(7例)	60.77(m ²)
3人(2例)	「夫婦+子」(2例)	3DK(2例)	59.65(m ²)
4人(1例)	「夫婦+孫2人」(1例)	3DK(1例)	63.55(m ²)

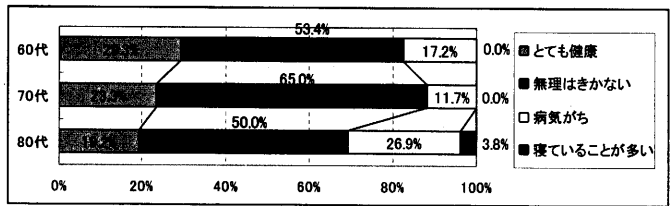


図-1 年齢別に見る調査対象者の健康状況

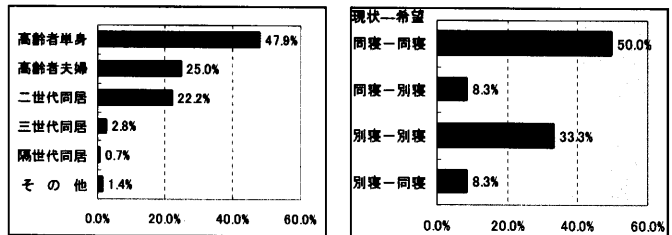


図-2 調査対象者の家族構成

図-3 夫婦同別寝の現状と希望

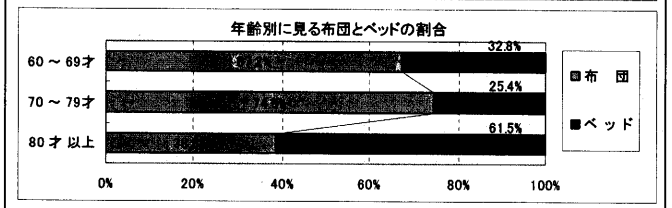
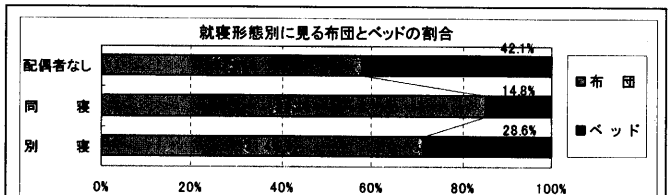


図-4 就寝での布団とベッドの割合

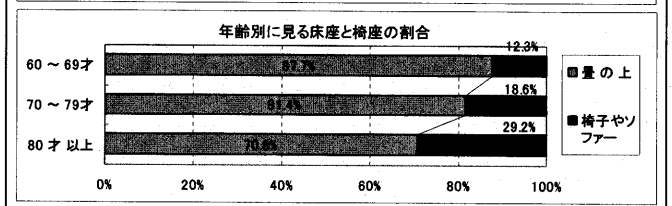
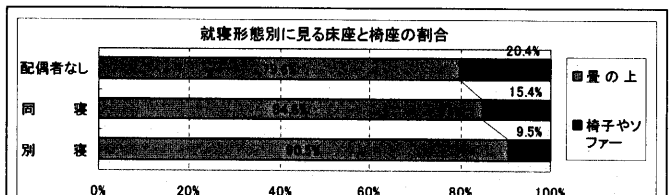


図-5 くつろげる座り方

3.2 食事での座卓とテーブルの割合

全体として69.5%の高齢者が食事の時に座卓を利用している。配偶者の有無及び同寝・別寝による大きな違いが認められず、年齢別に見ても大きく違うことはない。これはベッドでの就寝は80代から大きく増えていることに比べて、食事の場ではまだ元の住様式を維持していることを示している。

3.3 くつろげる座り方

高齢者にとってくつろげる座り方は「畳の上」と回答した割合は全体の82.1%を占めている。年齢の増加に従って「畳の上」から「椅子やソファ」へ移行する傾向があり、80代では29.2%となっている。(図-5)

4. 夫婦の住まい方の変化と居住実態

4.1 椅子・ベッドの利用実態

実測調査で夫婦を含む12世帯について、就寝でのベッドの利用及び起居での椅子の利用に注目すると、図-6に示すような5種類に分けられる。(ここで起居とは食事と居場所^(註9)を含むものとする)
 ①夫婦共に就寝は布団・起居は床座(2/12例)。②就寝は夫婦共に布団であるが、起居においては床座と椅座が混在(6/12例)。その中で、居場所は床座・食事は椅座が1例、食事は床座・居場所は床座と椅座の混在が5例。さらに、居場所での床座と椅座の混在は、同室での混在(4例)と別室での混在(1例)や、夫婦片方の混在(4例)と両方の混在(1例)等多様に現れている。③就寝では片方がベッドを使い、起居では両方共に床座(1例)。④片方は就寝にベッド・起居に椅座のみ(2例)。⑤片方は寝たきりで、起居もベッド(1例)。今回の調査では、夫婦は両方ベッド使用及び両方居場所

では椅座のみの例が見られなかった。

4.2 椅子・ベッドの使用による住まい方の変化

(1) ベッドの使用と同寝・別寝

夫婦を含む12世帯の中、同寝は7例、別寝は5例である(図-6参照)。同寝の7例の中、夫婦共に布団を使用するは6例であり(①と②)、もう1例は、夫が寝たきりで介護ベッドを使い、妻もベッドを希望するが部屋が狭くてできないため、ベッドの側に布団で就寝する(⑤)。別寝の5例では、片方ベッドが3例を占めている(③と④)。生活リズムが違う等を理由に別寝とする場合もあるが、④「NG13」の場合は、妻が足の骨折をきっかけとしてベッドを使い始め、夫は布団のまま夫婦は別寝となっている。片方のベッド使用も別寝になる一つの要因であると分かった。

(2) 椅座と居場所の同室・別室

全体的に、夫婦は居場所同室の傾向が見られる(10/12例)。居場所が別室の2例はいずれも別寝の例となり、片方が椅座のみで夫婦は各自の寝室を居場所としている(④「NG11」、「NG13」)(図-6参照)。夫婦の居場所が同室か別室かは、くつろげる座の様式に影響されていると考えられる。③「NG20」の場合は、片方がベッドを使用するが、居場所では夫婦共に床座で、居場所が同室である。しかし、片方が床に座れなくなり、椅座を必要とする場合は、夫婦の居場所が別室になる傾向が捉えられた。床座と椅座では視線の高さが違うことや、居場所では夫婦共に椅座のみの空間を備えていないことが要因であると考えられる。一方、片方が寝たきりの「NG04」(⑤)の場合は、介護の必要性及びコミュニケーションをとるために、妻が常に夫の傍にいる。居場所においても同室で対応している。

4.3 椅子・ベッドの使用による問題点及び続き間の役割

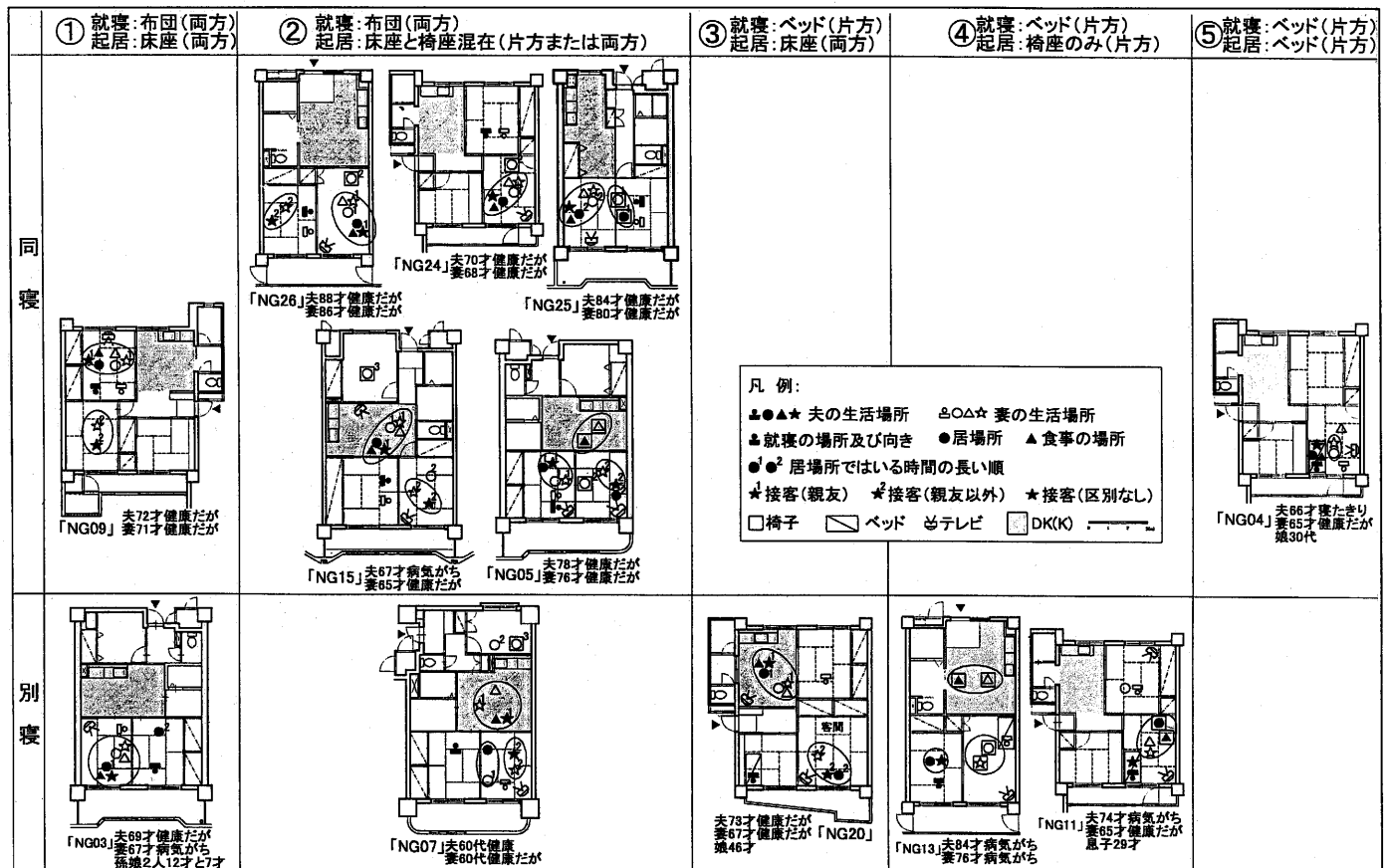


図-6 夫婦を含む世帯における椅子・ベッドの利用実態

まず、就寝は布団・起居は床座と椅座混在の場合における問題点を考察してみる。居場所では床座と椅座が混在するために、より広いスペースが必要になると考える。特に図-7 事例1のように、夫婦は居場所同室で両方共に床座と椅座を使う場合には、6畳1室に収めることができず、続き間を仕切る襖4枚のうち3枚を取り外して対応している。DKでテーブル・椅子を使う場合には、事例2のように、テーブル・椅子は置く場所が限られ、客間への出入りに支障が生じている。

次に、片方はベッド・椅子のみの場合の問題点を見てみる。4.2(2)に述べたように、全体的に夫婦は居場所同室の要望が読みとられ、片方がベッド・椅子のみの場合は就寝は別室になり、居場所も別室となる。事例3では、夫と妻の寝室が襖2枚で縦方向につながり、襖を1枚開いて行きすが、テレビを見る等食事以外の時間は各自の部屋で過ごしている。事例4では南側の2室が横に襖4枚につながり、妻は襖2枚を開いて夫と同じテレビを見ている。このように夫婦は和洋式の違いで別室にいるが全体として一体感のある住まい方が可能となっている。特に縦方向の続き間より横方向の方が間仕切りの使い方で開口部に工夫ができ、和洋式の共存には対応しやすいと考えられる。

一方、事例4では、ベッドを使用するのでDK隣接の洋室が妻の寝室となり、接客は奥の和室で行う。客は妻の寝室を通らなければ和室に入れない。ベッドの利用によって室機能が変化し、経路の変更が必要になる時には、2部屋それぞれに入口を設ける方が対応しやすいと考えられる。

そして、片方が寝たきりの場合は介護者の目が届く場所にいることが重要で、介護ベッドとその周りは夫婦の生活場所となっている。事例5では夫婦二人の生活は全て6畳1室に限られ、妻もベッドを使いたいが狭くてできない。続き間があれば襖を開いたり取外して一体に使う等選択肢が増え、対応しやすいと考えられる。また、縦方向の続き間に比べ横方向の場合は夫婦共に日当たりのよい場所で生活できる利点があげられる。

続き間は椅子・ベッドを使用する際に限らず、和式生活の場合にも活用されている。事例6のように、別寝の夫婦は部屋を広く使い、就寝する時にコタツの移動を避けるために、2室の間にコタツを置いている。以上のように、和式生活でも、椅子やベッドの使用が混在したり、片方が要介護になったりしても、続き間が一体感のある住まい方に重要な役割を果たしている。

5. 単身高齢者の住まい方の特徴

実測調査での単身高齢者の住居の平面構成を図-8に示す。DKの位置及び部屋とのつながり方により、大きく3種類に分けられる。AはDK(K)が南側に位置し、隣室と連続している。BはDK(K)が北側に位置し、南側の隣室と連続している。CはDKが北側に位置し、南側の部屋とは連続していない^(註10)。また、図-8でも就寝と起居に注目して住様式を①から⑤に分類した。

5.1 ベッド・椅子の利用実態

単身世帯においても椅子・ベッドの利用は多様な様態に現れている。実測調査で単身高齢者14世帯^(註11)の中、布団で就寝するは8例を占めており、その中では起居が床座は6例で、床座と椅座が混在は2例である。ベッドを使う6例中の4例は、足が不自由や病氣、腰が骨折した等特殊な事情がある場合となり、他の2例は82才と79

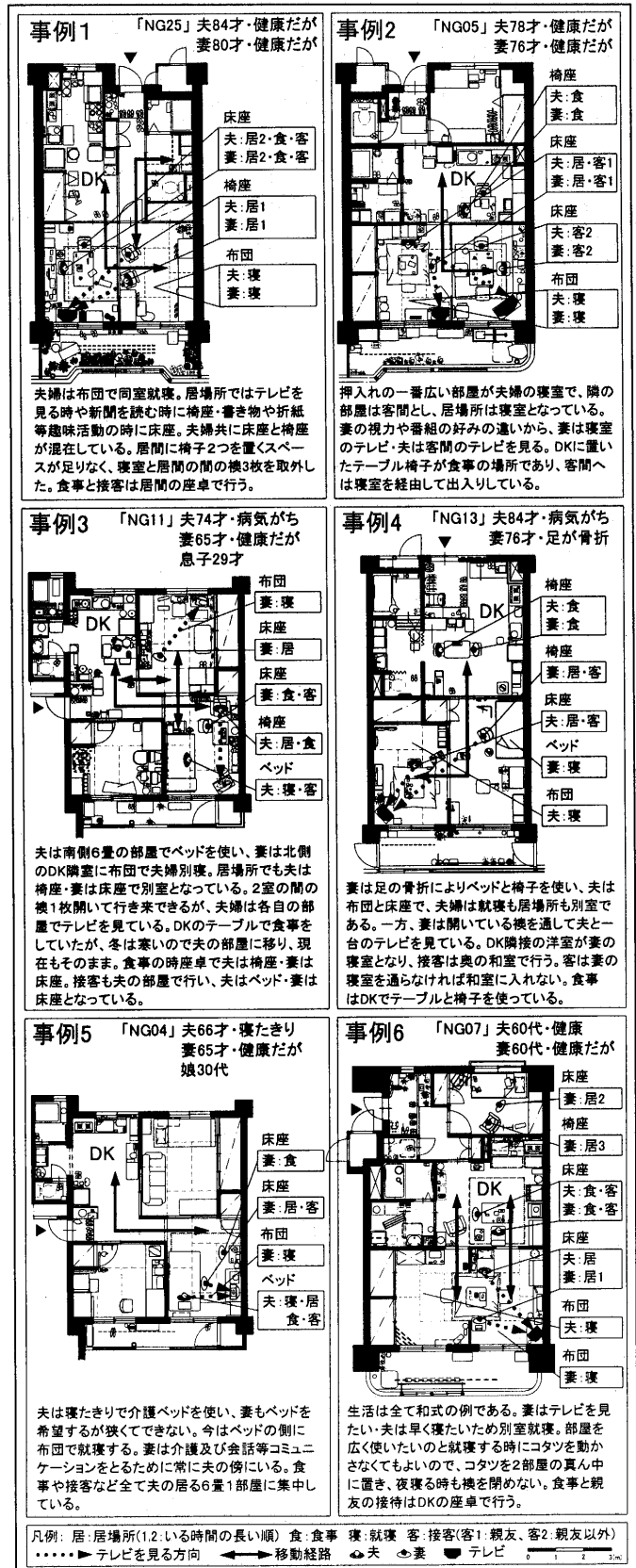


図-7 夫婦を含む世帯住まい方の事例

才で最も高齢の2人となっている。ベッドを使う6例では、起居が床座は2例、床座と椅座が混在或いは椅座のみは3例、起居も主にベッドで行うは1例となっている。(図-8 参照)

5.2 ベッド・椅子の使用による住まい方の特徴

図-8に示すように①から③までの10例では、食事と接客は殆ど

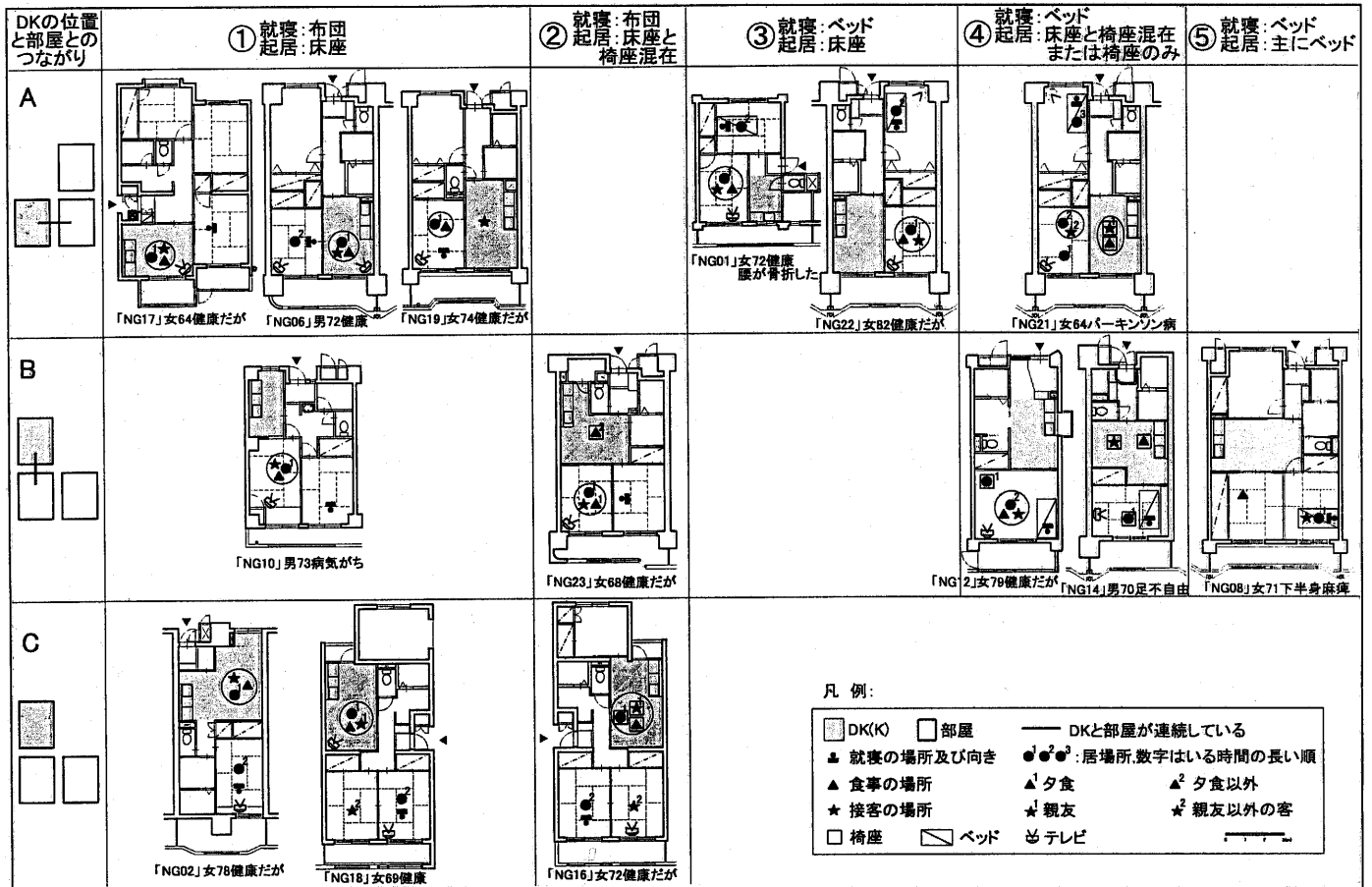


図-8 単身高齢者のベッドと椅子の利用実態

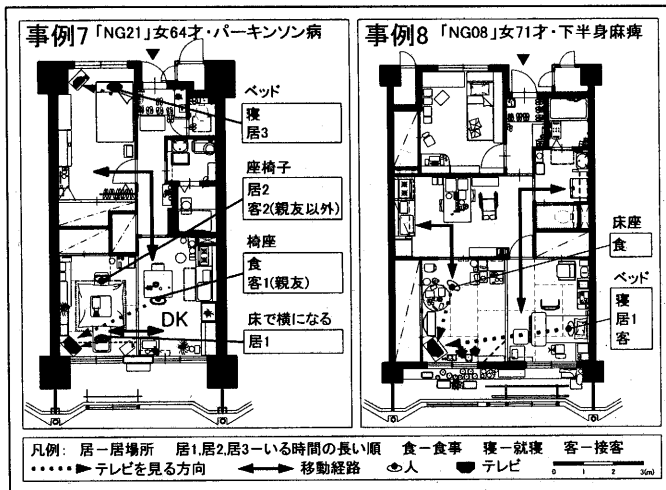


図-9 単身高齢者の住まい方の事例

居場所1と重なり(注12)、居場所は生活の中心である。しかし、④就寝はベッドで起居も椅座が使われる場合には、必要な家具が増え、一箇所に集中することが難しく、食事・接客が居場所1から分離し、同室内での居場所分散も発生している。例えば④の「NG12」ではテレビを見る時に椅座・お茶を飲む時に床座。「NG21」(図-9参照)では、テレビを見る時は床で横になり、本を読む時は座椅子に座るように、行為に対応して座の数が揃っている。また、③と④ではベッドを使うが、昼間はベッド以外の場所で生活し、ベッドを客に見せたくない要望がある。一方、動きがさらに困難になる場合には、⑤「NG08」(図-9参照)のように、居場所と接客が就寝の場所と重なり、ベッドは生活の中心となる。この場合はベッドを日当たりがよく、

外の景色が見える場所に置いている。また、移動が困難なため、食事場所からDKとベッドからトイレへの移動は、2室それぞれの入り口を通して最短経路をとっている。

このように多様な住まい方の中でテレビを見る住要求は変わらない。分散した食・寝・居の場所からテレビを見るために、テレビを2台設置したり続き間の襖を外して対応している。

5.3 平面構成と住まい方

(1) 平面構成による居場所の選択

図-8に示すように、AとB合わせて11例では、何れも居場所1は南側の部屋(或いはDK)となっている。しかし、Cは南側の部屋とDKに連続性がないため、3例共に北側にあるDKを居場所としている。このように、単身高齢者が居場所を選択する時には、DKとの繋がりを最も重視する特徴が捉えられた。

(2) 平面構成と住様式変化の対応

次に、居場所1が南側となっているAとBで食・寝・居の場所に注目し、空間の利用状況を比較してみる(図-8参照)。

Aで布団で就寝する場合は、DKの隣室が寝室となり、居場所はDKとなっている(注13)。DKには流しの他に冷蔵庫、食器棚等が設置されるため狭くなり、「NG06」の居住者は「コタツもテーブルも置けない」。それに対し、BではDKに連続している部屋が居場所となり、コタツや座卓が使える。

ベッドで就寝する場合は、Aでは寝室を北側の部屋に移し、居場所はDKの隣室となる。ベッドを客に見せたくない要望があり、Aの方が独立した寝室をとりやすい。また、DKでテーブルを使って食事する場合に、隣室のテレビを見やすい。Bでは④1DKの2例は、ベッドを客に見せたくない要望に満足しにくい。

身体能力の低下が進み、起居が主にベッドとなる場合には、「ベッドから見える景色」という要望にAの北側寝室では対応できない。また、図-9「NG08」のように続き間の襖を全部外して一体で利用する場合は、AではDKを含む形となる。ベッドからの視界から流しを隠す工夫も必要となる。それに対し、Bでは身体能力の低下による就寝場所の変更は必要なく、南側の2部屋が広く使え、必要に応じてDKとの距離も選択できる。

住様式の変化に対応するには、AとBそれぞれに利点と問題点があると分かった。

(3) 平面構成に対する単身・夫婦の対応

市営住宅において、2DKの住居は単身高齢者以外にも高齢者夫婦が住む場合もある。今回の実測調査で2DKに住む夫婦世帯(3例)は何れも平面構成Bの住居となっている(図-6参照)。Aの住居に夫婦で住む場合は、4.3に述べたように片方がベッド・椅子のみで夫婦が就寝も居場所も別室になる場合には、夫婦の生活が南側の部屋と北側の部屋に分離され、空間の共用が難しい問題や、要介護になる場合にも対応しにくい等問題が生じると考えられる。

6. まとめ

本編の分析を通して、以下のことを明らかにした。

(1) 高齢者がベッドで就寝する割合は単身高齢者と夫婦別寝の場合に高い。80才を境にベッドでの就寝が半数を超えて増加する傾向が捉えられ、くつろげる座り方は加齢に従って「畳の上」から「椅子やソファ」へ移行する傾向がみられた。

(2) 椅子・ベッドの利用と夫婦住まい方の変化との関連について、片方のベッド使用は別寝となる一つのきっかけであり、片方が床に座れなくなることは夫婦の居場所別室につながっている。一方、片方が寝たきりになると、就寝も居場所も同室で対応する事例が見られた。

(3) 居場所では床座と椅座が混在する場合には、より広いスペースを必要とし、DKでテーブル・椅子を使う時に経路の支障になる場合がある。片方が就寝はベッド・起居は椅子のみの場合は、夫婦は就寝も居場所も別室になり、夫婦の生活が分離されている。そのため室機能や経路の変更が必要になる問題も生じている。片方が寝たきりの場合は、夫婦の生活が要介護者のいる場所とその周辺に集約する例もあり、南側に2室が並び、それぞれに入り口を設ける続き間がより対応しやすいと分かった。

(4) 単身高齢者では、食事と接客場所が居場所1と重なる傾向が見られる。しかし、身体能力の低下によりベッド・椅子が使われる場合に、食事と接客が居場所1から分離し、行為に対応する同室内での居場所の分散もみられる。ベッドが生活の中心になる場合は、ベッドからの景色や動線が重要となる。

(5) 平面構成と住まい方の関連について、単身高齢者が居場所を選択する時にはDKとのつながりを最も重視する。C(DKが北側にあり、南側の部屋に連続していない)では就寝以外の生活場所は北側となっている。A(DKが南側にあり、隣室と連続している)では、独立した寝室をとりやすく、DKで食事する場合は隣室のテレビを見やすい利点があるが、就寝は布団でDKを居場所とする場合や、ベッドを生活の中心とする場合、及び夫婦で使う特に別寝と要介護の場合には対応しにくい問題点があげられる。B(DKが北側にあり、南側の部屋に連続している)では、比較的に住まい方の変化に対応し

やすいが、寝室に独立性を要求する場合には満足しにくい。

南側の続き間2室にそれぞれ入り口があり、北側のDKと連続する平面計画が、夫婦の場合にも単身の場合にも住まい方の変化に柔軟に対応できると考えられる。

謝辞

調査にご協力頂いた高齢者の皆様、及び新潟県庁渡辺斉様、新潟市役所笹川文雄様、石渡一彦様、広井利昭様、田口信雄様、新潟大学西村研究室生今井恒夫、渡辺隆見、佐藤匠、棒田恵、山田文宏に感謝申し上げます。

注

- 1) 新潟市都市整備局開発建築部住宅課が提供したデータによる。高齢者は60才以上とし、新潟市の範囲は平成17年の合併前とする。
- 2) 参考文献1)参照
- 3) 参考文献2)参照
- 4) 参考文献3)参照
- 5) 参考文献4)、5)参照
- 6) 参考文献6)、7)参照
- 7) 参考文献8)参照
- 8) 本稿では、布団や床座での生活を「和式」、ベッドや椅子での生活を「洋式」と定義した。
- 9) 本稿では、就寝や食事、接客以外で家にいる場所を「居場所」と定義し、そして居場所にいる時間の長い順で「居場所1, 2, 3」のように区別する。
- 10) 南側に位置する2室或いはDK(K)と部屋は何れも続き間である。
- 11) 実測調査では女性高齢者と娘同居の「NG08」は、親子の生活は全く別々なので、単身高齢者の例とする。
- 12) 10例では、食事が完全に居場所と重なるが9例で、1例はお昼はDK・夕食は居場所となっている。接客が完全に居場所と重なるが7例で、親友は居場所・親友以外の客は専用客間で接待するが2例、寝室を居場所とするのでDKで接客するは1例である。
- 13) A「NG19」ではベランダ防風ガラスの影響でDKより寝室の方が明るいため寝室を居場所としている。この場合は座卓やコタツを使っていない。

参考文献

- 1) 古賀紀江, 高橋鷹志: 一人暮らしの高齢者の常座をめぐる考察(高齢者の住居における居場所に関する研究 その1), 日本建築学会計画系論文集, 第494号, pp.97~104, 1997.4
- 2) 小川正光: シルバーハウジングにおける住戸内の居住実態, 日本建築大会学術講演梗概集(関東), pp.315~316, 1997.9
- 3) 橋弘志, 高橋鷹志: 一人暮らし高齢者の生活における住戸内外の関わりに関する考察, 日本建築学会計画系論文集, 第515号, pp.113~119, 1999.1
- 4) 沢田知子: 熟年・高齢期におけるライフスタイルと住まい方の特徴(長寿社会におけるライフコースの充実・支援にむけた住宅計画 その1), 日本建築学会計画系論文集, 第547号, pp.95~102, 2001.9
- 5) 沢田知子, 渡辺秀俊, 谷口久美子, 丸茂みゆき: 熟年・高齢期におけるライフワーク・人間関係・生き甲斐等に関する考察(長寿社会におけるライフコースの充実・支援にむけた住宅計画 その2), 日本建築学会計画系論文集, 第562号, pp.135~142, 2002.12
- 6) 増永理彦, 富樫類: 公団賃貸住宅における高齢夫婦の同別室就寝に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, 第549号, pp.247~252, 2001.11
- 7) 増永理彦, 米原慶子, 富樫類: 公団賃貸住宅における単身高齢者の住戸内生活行為に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, 第551号, pp.259~265, 2002.1
- 8) 番場美恵子, 竹田喜美子: 都市集合住宅居住の自立高齢者の生活における「個」を中心とした住まい方の変容過程(シルバーステージからみた高齢期の居住環境に関する研究 その1), 日本建築学会計画系論文集, 第592号, pp.25~31, 2005.6
- 9) 林文潔, 西村伸也, 高橋百寿, 野口孝博, 陸偉, 月館敏榮, 森下満, 周博: 中国大連市・ハルビン市集合住宅に住む高齢者夫婦の住まい方の特徴(都市在宅高齢者の住空間計画に関する研究), 日本建築学会計画系論文集, 第599号, pp.1~7, 2006.1

[2006年3月13日原稿受理 2006年7月27日採用決定]